

大陸（北支）

北支戦記

神奈川県 萱野 明

昭和十六（一九四一）年十二月八日、米英濠と大東亜戦争に突入、東條英機総理大臣は、翌年三月卒業見込の大学生および夜間商業学校五年生で徴兵検査延期中の学生に対して臨時徴兵検査を発令しました。

私は十二月下旬、横浜高商（現横浜国大経済学部）において徴兵検査を受けました。その結果、昭和十七年四月十日、東京都麹町区代官町にあった近衛歩兵第二連隊に入営が決まりました。第二

中隊（穂坂隊）穂坂三郎隊長でした。そのあと野戦帰りの佐藤好弘隊長となりました。そして軍機秘密のため東部第三部隊カ隊と名称が変わりました。

四月二十九日、代々木練兵場において、天皇陛下が白馬（白雪号）にお乗りになり、そのお姿の前で威風堂々と近衛師団の観兵式が挙行されました。この時のお昼弁当ですが初年兵の鮭はみんな「かま」ばかりでした。よくもこれだけの数が集まったものかと思いました。

五月下旬、米軍機が、はじめて東京上空に侵入し、我々はちょうど、戸山射場で射撃の訓練中で、駆け足で連隊へ戻り配置につきました。

演習は毎日代々木原です。木戸教官は親心で、

班内に帰るとタバコも吸えないからと、白百合女学校で又銃をして一服させてくれました。出張演習は御殿場富士の裾野で行いました。宿舎は滝ヶ原と板妻でした。

特別教育を受けることになりました。隊長は野本中尉殿、教官は木戸高安見習士官殿、助教は高安忠二班長殿、助手は長谷川秀幸上等兵殿でした。このほか連隊での出張演習もあり、これは主として夜間に紅白に分かれて戦闘をするものでした。帰路は箱根越えで大休止の後、双子山か金時山を軍装で駆け上がります。遅いときや直し組に入られます。小田原までの行軍では、塔ノ沢か宮ノ下の民家やお店での民宿の一泊で、ここで地方を懐かしく思ったものです。

九月上旬には板橋から埼玉県にかけての師団演習があり、一週間続く演習ですが、どこへ行っても初年兵は多忙です。これはいたし方ないことでした。

九月下旬に転属命令ができました。営地外の外出をして一泊二日の許可ができました。営地外「外出」の印は手に外套を輪にして持ちます。憲兵が駅で見分けます。家に帰宅しましたらちようどお祭りの当番宿で、家には多勢の町の方が集まっています。近衛兵でも野戦に行くのかと話していました。

この間母はよく面会所へ足を運んでくれました。一人息子で余計心配されたのかも知れませんが。ある夜中、銃と帯剣に白布を巻き、屯営を出発しました。この日も母は品川駅頭に顔を出して見送ってくれました。ありがたいことです。心の中で「出征してまた戻って来ます」と口ずさみました。

父は明治三十七（一九〇四）〜八年の日露戦争で赤坂の歩兵第一連隊で乃木軍でした。凱旋し除隊して家に帰り、凍傷病のため片足、片手が不自由となり、遠くの外出には出られませんので、母に「よろしく頼む」といった由で心細かったこと

でしょう。

宇品港から朝鮮の釜山へ向かう。ここでは国防婦人会の方々が湯茶の接待で心から迎えてくれました。河南省開封駅着、第三十五師団歩兵第二一九連隊（湯口部隊）第四中隊（早川克己隊長）へ配属となりました。しかし近衛歩兵第二連隊へ召集で入った引率の横田班長殿と、転属した初年兵一個小隊で、蘭封の治安地区で警備の任にあたりました。

半月後、それぞれの中隊へ出発しましたが、小生だけは中隊に戻らず、開封駅前の岩谷隊（第一中隊）勤務となりました。鉄道警備とは線路を八路軍に破壊されないための警乗兵勤務で、特に前方を警護する目的で装甲列車への警乗勤務でした。その間、開封県蘭封附近の討伐にも参加しました。

十月、河南省中牟県楊橋の中隊本部に帰隊の命令がありました。数日後、朱仙鎮にある第二中隊

（原田隊）が作戦に出て残留の初年兵に被害があり、応援に出動しました。近歩二で同じ内務班だった堀江利重君（埼玉県大宮市出身）は分隊長として出勤中でお逢いできず残念でした。

一カ月後、危険な区域への分遣隊要員となり、三劉砦、東潭鎮、中牟新黄河渡河第一線後の毛庄分遣隊など次々に勤務しました。この区域は去年河南作戦の大きな激戦があり、多くの死傷者が続出した所です。その奥は鄭州、洛陽、重慶です。いったんは進撃して占領、日の丸の旗を掲げましたが不便なところで、食糧、弾薬の補給ができず、やむなく引き返す有様でした。慰問団の芸者さんなどが襲撃されました。

黄河の濁流は激しく、工兵隊でも目的地に着くに苦労しました。中州は砂が見えてもそのほかは深く、最初に渡河した部隊は普通に歩いても、後続部隊の時には胸までつかかり、大切な銃は水にぬれぬよう肩に横に担ぎます。下が軟らかくなり踏み込んでしまい雨あられの弾丸が飛ぶ中では生

きた心地せずの状況でした。

十二月初旬、小生は三度目の中牟県第一線後毛庄分遣隊に勤務となり渡河しました。そこには一個小隊がおり隊長殿に分遣隊勤務を申告しました。敵との距離六〇〇メートルです。日夕の点呼などは手榴弾が飛び交うので中止の有様でした。暗くなると匍匐で攻めてきます。昼間も立哨していますと向こうの歩哨の交代の様子などが一目で判るほどです。「マールカピー」と呼ぶので、こつちも「馬鹿野郎！」と言い返します。五年兵の通信兵が電柱で有線を補修していて、白の作業着を着用していたため目立ち狙撃されました。ある日、大毛塞の大隊本部の自動車で一個分隊が、離れた分遣隊へ糧秣を輸送中、八路軍（パロ）が竹藪の中から二〇〇〜三〇〇人が出撃してきました。即座に下車、応戦の準備をしました。擲弾筒一、軽機一の敵の包囲される恐れがあると知りましたが、寒さのため車が動かず、エンジン

にお湯をかけて温め始動し、ほっとして乗車をしました。しかし離れて乗り遅れた初年兵二人は置き去りとなり、とって返しますと道には小銃、帯剣をとられ無残な姿になっていました。ただただ合掌するのみでした。

その数日後も宣撫工作のため良民の部落に入つたのですが、暴動が起き、五〜六人の兵士の内生き残つたのは一人でした。

昭和十七年十二月一日付で早川隊（第四中隊）人事係からの通達により開封連隊本部勤務を命ぜられました。後毛庄の分遣隊の小隊長に申告を済ませて、第一線から四〇キロ離れた中国歴史ある都である開封市の連隊本部に着任しました。集成小隊（各中隊から集まる）小隊長は三宮曹長殿、任務は衛兵要員です。開封城内の東西南北の各正門の歩哨となりました。小生は主として北門・南門勤務です。

着任後まもなく蘭封の寒河江隊（第五中隊）に

派遣され、鉄道警備と分哨勤務となりました。一カ月後、徐州近くの騎兵連隊が包囲されたとの情報により作戦命令がありました。この時、寒河江隊の戦闘要員村岡忠良（川越市黒門町出身）四年兵が病気で入室しましたので交代要員として幾徳の作戦に出動しました。部隊名は「軍令陸甲第二六号」に依り東第二九二部隊となりました。

商邱幾徳の作戦は一カ月続きました。所謂第十二軍の十八年秋の滑縣附近の剔杖作戦です。この作戦でも激戦のなか戦車壕に落ちて困っている所を河南作戦で敵と組み打ちになり、金鷄勲章を受けた伊藤延彦上等兵殿が、走って戻って来られ「この銃につかまれ」と銃を差し出され、難を助けられ命拾いの恩人です。とても嬉しかったことは忘れられません。

この作戦も敵味方共に多くの戦死傷の犠牲者が出て休戦となり、開封へ入城しました。その後は連隊本部へ戻り、開封市内の城門警備、衛兵要員の勤務を致しました。特に北門は重要視されてお

りました。それは華北交通鉄道の宿舍、日本人学校、女学校、映画館、酒保、芸者街などが並んでおり、敵の密偵も多く出没するためでした。このため巡察将校の見廻り回数も多く、とても厳しかったです。

南門も重要な存在でした。二〇〇四〇キロ奥地から開封へ品物を運ぶと良い値段に売れたからです。特に布製品・岩塩は貴重で、現地人は儲けて帰りには家族へお菓子などを買って帰ります。砂糖は高級になっておりました。南門では、夜間はあちこちで銃声が聞こえ、犬の遠吠えがあり、厳しい警備でした。そのため中国側県警一人、婦人警官一人、日本軍歩哨と三人が立哨しており、「良民証」を発行して身体検査をいたしました。

衛兵所でも私はお土産等取り上げなかったもので、このことが部落から部落へ伝わったためか、朝の開門八時には大勢なだれこんで入ってきました。衛兵所には近くの小孩の太郎君と花子ちゃんを掃除にきました。目的はおむすび欲しさです。

たまには慰問袋の羽子板、コマ、かりんとう、などを上げると「大人謝々」と嬉しそうで可愛らしく思つたものです。

昭和十九年三月初旬、南海派遣隊が玉砕しておりましたので、我々東兵団（第三十五師団）にも命令が下りて転進することになりました。この師団は旭川第七師団の直轄で、昭和十四年に北支で編成され軍旗を拝受しています。下士官は十二〜三年兵の北海道出身者が多く、十三年徴集兵隊―現役兵は東京・埼玉出身、補充兵は北海道出身でした。兄弟連隊で北京のそば新郷には長谷川部隊、栗栖部隊（歩兵第二二〇連隊、第二二一連隊）がありました。

衛兵所附近の良民の農家の人々とお別れしましたが、なつかしさが込み上げてきました。そして開封市長さんの耳に入ったのか私に掛軸を差し上げますと申されましたが「これから先危険な所に行き、明日から先は真つ暗です」とご厚意に感謝

しお断りしました。無念でした。

昭和十九年三月三日、内地ではお雛祭の日でした。南海派遣のため河南省中牟県楊橋を出発、中隊長岡本史郎殿で集結地の開封駅に向かいました。

そして南海派遣第二方面軍、中部太平洋西カリソリン諸島セントアンドレウ諸島ソル島へ向かいました。

【解 説】

体験記筆者萱野氏の所属部隊は、第三十五師団歩兵第二一九連隊であるが、内地勤務から北支勤務となり、後に西部ニューギニア（南海派遣、第二方面軍）中部太平洋西カリソリン島セントアンドレ諸島ソル島で戦闘したのである。従つて、同部隊の略歴は左記の如く、北支―南方と転戦したことを知る。

歩兵第二一九連隊略歴

昭一四、

二、 七 編成下令。

三、 二三 軍旗拝受。

三、 二五 編成完結。

四、 一六 札幌発。小樽出港。

四、 二二 北支塘沽上陸。

四、 二六 北支河南省汲県着。

自六、 二八、 二八、 二〇 晋東作戦参加。

自一五、 四、 二二、 四、 二八

春季晋南作戦。

自六、 五、 七、 一〇

第一次冀南地区肃正討伐作戦参加。

自六、 二八、 二七、 三 六日攻勢摧作戦参加。

自七、 二一、 至七、 三一

第二次冀南肃正討伐作戦参加。

自一六、 一、 二六、 二、 一五 毫南五号作戦。

自五、 一、 至 六、 一五 中原会戦参加。

自一七、 四、 二九 至五、 一五

第二次冀南作戦参加。

自一八、 四、 一七、 五、 一一、 十八

春大行作戦参加。

五、 二四、 一六、 二〇 四十号作戦参加。

七、 一、 七、 三一、 十八 夏大行作戦参加。

九、 中旬、 一、 上旬 武号作戦。

一九、 三、 八 独立歩兵第四旅団と警備交

代。

三、 一四 南方派遣のため開封出發。

三、 二七 輸送船三池丸に乗船青島出

発。

四、 三 横浜寄港。四、 七 館山出

帆。

四、 一〇 父島寄港。四、 一八 同港出

帆。

四、 二四 パラオ上陸。

四、 二七 第一大隊(11・RIA)連隊砲

(TTL)通信隊)の一部 セント・マ

ンドレウス諸島に上陸配兵。

五、 一九 連隊主力パラオ出帆。

五、二〇 西部ニューギニアソロン上陸。

五、二三 大発に分乗マノクワリ經由タ
ンホル島に向かう。

五、二五 マノクワリ上陸。

五、二七 マノクワリ出発。

五、二七 ヌンホル上陸。

五、二七以降(ヌンホル) 支隊となり、
同島警備に任ず。

七、二 朝来上陸せる敵と激戦部隊玉
砕し、部隊長以下大部分生死不明とな
る。

二〇、八、一四 停戦となる。

一一、六 セントアンドレウス諸島の
部隊浦賀上陸復員す。

二一、五、二七 ニューギニアの一部、名古屋
に上陸、復員す。

二一、五、二七 復員完結。